

たまにおもうことですが、信心やお念仏、お浄土や往生ということは、日々バタバタと生きる私の普段の生活にとって、仕事や家事に追われる毎日の中でどういう意味を持つのか、どういう関係があるかということです。

朝のお勤めは朝のお勤め、そのあとの仕事や家事はお勤めとは別の物というふうに、仏事と生活を分けて過ごしている気がします。

そんな中で、信仰や聞法と生活との関係について、

ある研修会で印象的な言葉を聞いたのでそのことをお話しします。

その言葉は「当たり前とっていたことが、ありがたいことでした、と気付かせていただくのが聞法ということでしょう」です

私は普段、当たり前とありがたいを別の物、別のこととして生きているようです。

まず、「当たり前」は身の回りや日々の中でたくさんあります。蛇口をひねれば水が出ます。壁のスイッチをいれれば明かりがつきます。スマートフォンをタッチすると色々な商品が郡上の山間部でも翌日に宅配されます。今こうして口から言葉を出すのも、自動車で岐阜市の教務所に移動するのも、ガソリンが売っているのも、家に帰って食事をしてそのあと自分の部屋で眠るのもなど、すべてあたり前のことです。数え切れないほどあります。

一方、ありがたい、と思うことはそれほど多くはありません。

思いつくのは、人にとっても親切にしてもらったり、何か頂戴したり、何かお手伝いしてもらったり、（お布施をたくさん頂戴したりということですが）

毎日いくつもあることではありません。

当たり前とありがたいは、意味も数も全く違うこととして生きています。

「当たり前」が一瞬にしてなくなってしまうことがあります。

ひとつは大きな災害です。

水道も電気もガスも、スマートフォンも自宅さえも、

これまであたりの日常としてきたことが一変してしまいます。

歯を磨くこと、自分の布団で寝ることはかなり困難なこととなってしまいます。

もうひとつは私の体です。

健康であったり若くて元気であったとしても、その状態が明日以降も続く保証はなにひとつありません。

もし血管や神経の不具合が発生すれば、道を歩行中に対面の自動車の運転手がわき見をすれば

これまで何の意識もせずに見えていた景色や音を感じるができなくなってしまうかもしれません

立ったり座ったりすることができなくなるかもしれません。

私でなく、私の隣の人がそうなるかもしれません。

全てのいのちと縁は、今日とも知らず、明日とも知らぬことです

電気や水道

道路や家

水や空気

見たり聞いたり
話したり食べたり
寝たり歩いたり

これらを当たり前のこととしてしまいます。
もっと便利で、もっと安全で、もっと安価でもっと簡単に
と、いつも足りない足りないで満足できない私があります。

本当は、ひとつひとつの存在や行いや経験は
多くの人の努力や愛情のこもったことであったり
二度と体験できない貴重な出来事であったり
ふるえるほどまぶしいことなのかもしれません

多くの当たり前で困まっている私が
多くのありがたさに包まれていた私だったと
唯一、きずかせていただけることが仏法を聞くということではないでしょうか